

東大寺大仏殿



◇ 大仏殿で行われる法要など

晦日正月 午前0時より8時まで「初詣」大仏殿無料参拝

4月8日 午前8時より「仏生会」(花祭り・甘茶掛け)

5月2日 午前8時より「聖武天皇御忌十講」天皇殿
午後1時より「聖武天皇祭」大仏殿まで練供養
鏡池舞楽台にて舞楽・慶讃能奉納

5月3日 午前11時より「献茶式(裏千家)」

7月28日 午前8時より「解除会」(茅の輪くぐり)

8月7日 午前7時より「大仏さまお身拭い」大仏殿(但し、入堂は午前7時30分より)

8月13日・14日 午後7時より午後9時まで 大仏殿無料参拝

8月15日 午後7時より「万燈供養会」午後10時まで(有料)

10月15日 午前10時より「大仏さま秋の祭り・献茶(表千家)」



東大寺ミュージアム

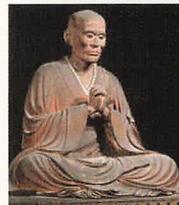
◎ 開館時間 午前九時半から。閉館時間は大仏殿

と同じですが入館は三十分前まで。

なお、展示替え等のため休館日があります。

◇ 江戸期再建

◎ ところが、永禄十年(一五六七)十月に、三好・松永の乱が起これり、伽藍は二月堂や法華堂、南大門や転害門、正倉院や鐘楼など僅かな建物を残して灰燼に帰してしまいました。時は戦国時代、本格的な復興は遅々として進まず、公慶上人が活躍されるまでの約百二十年間、本尊盧舎那仏は雨ざらしの状態だったのです。公慶上人は、十三歳で東大寺に入寺した時の決意を実現させるため、大変な苦勞をされながら、ようやく江戸幕府の許可を得て、全国くまなく勸進行脚を実践され、まずは元禄五年(一六九二)に「大仏開眼供養」を執行されました。大仏殿の完成は上人の没後でしたが、十八世紀後半には中門・東西廻廊・東西楽門・両脇侍の巨像も造立され、現存の寺観が整えられました。



公慶上人坐像
(重文・江戸時代)



大仏殿虹梁木曳図
こうりょうこぎ

◆ 東大寺天平創建 大仏殿（東大寺金堂）国宝

◎ 聖武天皇の発願により創建された東大寺の本尊（大仏さま）は、『華嚴経』の教主である盧舎那仏で、天平勝宝四年（七五二）四月に「大仏開眼供養会」が盛大に厳修されました。その後も講堂・東西両塔・三面僧房などの諸堂の造営は、延暦八年（七八九）三月の造東大寺司の廃止まで続行されました。

◎ 東大寺の創建および大仏の造立に深く関わられた聖武天皇・菩提僊那・良弁・行基の四人を四聖と言います。

◎ 盧舎那仏の名は、宇宙の真理を体得された釈迦如来の別名で、世界を照らす仏ひかり輝く仏の意味。左手で宇宙の智慧を、右手に慈悲をあらわしながら、人々が思いやりの心でつながり、絆を深めることを願っておられます。

◎ 東大寺は国分寺として建立され、国家の安寧と国民の幸福を祈る道場でしたが、同時に仏教の教理を研究し学僧を養成する役目もあり、華嚴をはじめ奈良時代の六宗（華嚴・三論・俱舍・成実・法相・律）、さらに平安時代の天台と真言も加えた各研究所（宗所）が設けられ、八宗兼学の学問寺となり、多くの学僧を輩出しました。

◆ 華嚴の教え 盧舎那大仏（本尊）国宝

◎ 『華嚴経』には、世界に存在するあらゆるものは、それぞれの密接な相関関係の上に成り立ち、秩序ある世界を形成していると言われています。華嚴経の教えを實現させたいという聖武天皇の願いが、全国規模の国分寺及び国分尼寺の建立にとどまらず、大仏造立・東大寺創建へとつながっていったと言えましょう。

◎ 聖武天皇は、人々が思いやりの心でつながり、こども達の命が次世代に輝くことを真剣に考えられ、動物も植物も共に栄えることを願い、さらに造像にあたっては、広く国民に「二枝の草、ひとにぎりの土」の助援をよびかけられました。

つまり、大仏殿の造立は政府の事業というばかりではなく、国民に結縁を求め、助力によって完成しようとした点に、従来の官大寺建立とは明らかに異なるものがあるのです。いわゆる大衆を知識（協力者）として造立を果たそうとしたもので、この精神が、東大寺では各時代の再興や修理にあたって実行され、現代に至るまで常に相承されています。

◆ 鎌倉期再建

◎ 平安時代にも修理と造営は絶え間なく続けられました。斉衡二年（八五五）の大地震によって落下した大仏の頭部は真如法親王によって修復されたものの、失火や落雷などによって講堂や三面僧房、西塔などが焼失、南大門や大鐘楼も倒壊しました。さらに治承四年（一一八〇）、平重衡の軍勢により、大仏殿をはじめ伽藍の大半が焼失してしまいます。

◎ しかし翌年には俊乗房重源によって復興に着手され、源頼朝の絶大な協力もあって文治元年（一一八五）に後白河法皇を導師として大仏の開眼供養が行なわれました。

翌文治二年に周防国が東大寺造営料所に当てられてから復興事業は着々と進み、建久六年（一一九五）に大仏殿落慶供養が行なわれました。

こうした復興に伴い教学活動も活発になり、鎌倉時代には多くの学僧が輩出しました。



大仏縁起絵巻（瀬戸内海をゆく大仏殿四天王像の用材）



重源上人坐像（国宝・鎌倉時代）



音声菩薩（八角灯籠）



大仏縁起絵巻（五百羅漢飛來の図）



良弁僧正坐像（国宝・平安時代）



大仏縁起絵巻（大仏開眼供養会の場面）